

接続詞ダカラについて

近 藤 研 至

The Function of *Dakara*

Kenji Kondo

The aim of this paper is to describe the function of *dakara*.

It was pointed out that *Dakara* is a logical connective. But *dakara* has a wider range of use. Therefore, its function cannot be explained by the logical connection. *Dakara* is a Japanese discourse connective.

This paper claims the following points.

- (1) *Dakara* is not used between two statements. *Dakara* as a discourse connective is on the statement following *dakara*.
- (2) When an assumption P is produced in a speaker's cognitive environment, a context C appears from the same speaker's assumptions. Then a set of assumptions P contextually implies an assumption Q in a context C. In the situation the speaker begins with *dakara*.
- (3) The function of *dakara* is to confer that Q is produced by a contextual implication on utterance Q.

1 従来の研究について

ダカラの記述は、蓮沼（1991）より以前は次のような環境で扱われることが多かった。

- (1) キクチは欠席を繰り返した。だから留年が決定した¹。
ある文（「キクチは欠席を繰り返した」）とそれに後続する文（「留年が

決定した)の「論理的な関係」を観察して、ダカラは「原因・理由」から「結果・帰結」を導く接続詞であると記述されることが多かったのである。それに対して、蓮沼は、ダカラは対話の中に多く現れることを指摘して、(1)のようなダカラのタイプを「独話型」とし、以下の(2)のようなダカラのタイプを「対話型」とし、「対話型」について豊富な用例をもとに記述を行った²。

- (2) a A「なんか武蔵野線止まってるみたいだよ」
 B「だから、今日、こんなに欠席が多いんだ」
- b A「彼女、卒論の追い込みの時期にサイパン行ってたんだって」
 B「だからあんなに日焼けしてたんだ」
- c A「明日中にはなんとかレポートを仕上げますから」
 B「だから、何？」
- d A「明日中にレポートを提出しなさい」
 B「え、でも、明日はバイトが朝から入っていて……」
 A「だから、明日中に出しなさい」

蓮沼は、まず「対話型」を「独話型に還元可能な用法」と「独話型に還元不可能な用法」に分ける。(2) a と (2) b が前者で、(2) c と (2) d が後者である。さらに二つの「用法」は、(2) a が「結論導出型」、(2) b が「結論正当化型」、(2) c が「聞き手の発話意図の明確化を求めるタイプ」、(2) d が「聞き手に正しい理解を求めるタイプ」と分類されている。このことから、蓮沼は「独話型」とは、PとQの「論理的な関係」として「因果関係」を認めることができるタイプであると考えているようである。蓮沼はこのように整理した後、「対話型」のダカラに共通して認められる「特徴」は、「自分の発言の土台となる情報や知識を、既存のものとして扱うという、話し手の情報の認定のし方に見られる性

質である」としている。

2 従来の記述の問題点

2-1 問題点(1)

こうした蓮沼の記述は多くの用例から帰納されたものではあるが、いくつかの問題点をはらんでいる。まずは、蓮沼の記述は「従来型の記述」と同様の問題を抱えているということである。ここで、小論が「従来型の記述」と呼ぶのは、接続詞の記述において、前文Pと後文Qとの「論理的な関係」を見て、接続詞自体は、そのPとQの「間」にある語として扱うにとどめる記述のことを言う。蓮沼は、多くの用例を対象に記述を試みているのであるが、実はこうした「従来型の記述」と並行的であり、「従来型の記述」同様の二つの問題点をはらんでいる。

一つ目は、ダカラがあるときのPとQの「論理的な関係」を「因果関係」として記述するのだが、ダカラはそれにどのような貢献をしているのかということに対してはまったく触れずじまいで、結局、PとQの関係を、あたかもダカラの「用法」であるかのように記述しているという点である。

もう一つは、PとQの「論理的な関係」を記述しようとしているのであるが、Pが特定できない用例が多数存在するという点である。「従来型の記述」では無前提的にPを「実現体」として取り上げた上で、それを「命題」、「事態」、「発話」、「文」、「発話意図」、「発話の集合」、と、いろいろな呼び方をしてきた。そして、そのような実現体Pと、ダカラを含む文Qとの「論理的な関係」について記述してきた。しかしそうした態度は、次のような例の扱いに困ることになる。

- (3) (出席日数が足りなくなって、留年が決定したキクチに対して)
だから、あれほど、出席日数に気をつけろって言ったでしょ！

(4) 清水「三谷さんとか女子アナの「汚いな」「こずるいな」と思うところは、「もう、あたし全然出る気なかつたんです」みたいなこと言うじゃない。「目立つの大っ嫌いなんです～」みたいなことを。その度にいつも臍をかんでますよ。」

三谷「でもまあ僕はホントに本来表に出る人間じゃないですからね。」

清水「あれ？演劇か何かやってませんでしたっけ？」

三谷「はい、遊びで役者はやったことはありますけれども……。」

清水「(笑) だから、絶対に自己顕示欲がちょっとある人ですって。」

三谷「ないですね。」(むかつく)

(3) は実現体Pが存在しない場合である。また(4)はPがどれであるのか特定しにくい場合である。こうした例の場合、Qと「接続」される実現体Pが特定できないために、ダカラについて説明ができないことになってしまうのである。にもかかわらず蓮沼は「対話型」のダカラに共通する性質として、「自分の発言の土台となる情報や知識を、既存のものとして扱うという、話し手の情報の認定のし方に見られる性質である」と述べている。この記述は、実現体Pの特定をしないままPの記述をおこなったことになり、しかもこれではダカラについての記述にはならないと言えよう。

2-2 問題点(2)

もう一つの問題点は、蓮沼の「独話型」と「対話型」という分類である。蓮沼の「独話型」と「対話型」の分類は、ダカラが「独話」に現れているのか「対話」に現れているかに根ざしている。しかし、次のよう

な例は、どちらの「型」に分類されるのであろうか。

- (5) 齋藤「……で、韓国社会では大問題なんです。日本以上に集団主義だから、一人でご飯食べたりすると、もう変なやつだと言われてしまう。」

田中「一人でご飯を食べるだけで？」

齋藤「そうそう。だから牛丼屋とかないわけです、韓国は。」(爆)

- (6) ダンプ「あの盲腸がなければ300勝以上したと思う。盲腸切って少し太ったんだよな。そしたら全然練習できんようになった。」

江夏「あれは本当、悪循環やったね。太るから練習しない。練習しないから太る。ホント苦しかった。10キロ太ったんだから。それで全部その負担が心臓にきた。」

ダンプ「ただ、それでも投げているのを見て、人間って少々なことでもやれるんだなと思ったね。それで俺もケガしたって知らん顔して平気でできるようになった。どこもケガしてないかって聞かれて、フン、言いながらプロでやるとる人たち、昔はけっこうおったよね。」

江夏「まあ、ホント、痛いとかかゆいとか言うたら、笑われた時代やからね。「肩が痛い」言うたら、「痛いのお前だけや。お前さえがまんすりゃええんだから」って。そう言われたらもう……「痛い痛いって百回言うて治るんやったら痛いって言え。百回言うてもいっしょやろ。黙ってやれ」ってよく言われたもん。今の時代じゃ考えられんよ、絶対に。だから俺が五体満足で投げたのは昭和43年までよ。」(元)

これらはダカラを含む文が接続するPの特定が困難な結果、「独話型」の例なのか「対話型」の例なのかの判定に迷う。実際蓮沼のように「独

話型」と「対話型」を「独話」と「対話」という環境の問題に還元しようとする、扱いに困る例が多数出てきてしまう。こうしたことは、実は蓮沼が「対話型」を重視するあまり、「独話型」についてはまったく目配りをしていないことに起因する。「独話型」にも「対話型」同様の「豊かな用例」がある。

(7) 「新撰組！」で言うと、こないだ水道橋博士が、最終回の最後の十五分くらい見てないみたいなことおっしゃってたじゃないですか。だから、僕、あの後博士に送ったんですよ、事務所宛てに、DVDを。(むかつく)

(8) じゃあ、自分であんまり考えていかないほうがいいんですかね。例えばさっきの、「悲しいセリフは楽しく言え」はすごくためになったんですけど、くしゃみをするときには、だから咳き込むようにやれてことでしょ？(いらつく)

これらは「独話」に現れているのであるが、P位置に現れる表現が(1)のような「扱いやすい」ものには程遠く、こうした例はいくらでも存在している。「対話型」も「独話型」も、実際の用例では「扱いやすい」用例は少なく、蓮沼のように「独話型」と「対話型」という分類の適用がとても困難になる。なお、蓮沼は、「対話型」について「独話型に還元」が可能か不可能かという視点を持ち込んでいるが、この二つの型の存在は上で述べたように確定していないのであるならば、こうした整理も検討し直さなければならなくなるだろう。結局、蓮沼の言う「独話型」と「対話型」とは、ダカラにとって与り知らない、発話が独話か対話かという発話のタイプの問題でしかないのである。

3 記述の道具立ての整理

3-1 接続詞について

接続助詞カラと接続詞ダカラは、古くから指摘があるように、親和性がある。

(9) a キクチは欠席を繰り返したから、留年が決定した。

b キクチは欠席を繰り返した。だから留年が決定した。

(9)aと(9)bとは「意味」的にはほとんど同じであると言ってよい。「キクチは欠席を繰り返した」という「事態」が「留年が決定した」という「事態」の「理由」(や原因)になっていることにおいては共通しているのである³。しかし、このような例をもってダカラとカラとが「同じである」とは言えない。(9) aと(9) bの比較から言えることは、PとQで同定される事態間の関係が同じであるということに過ぎないのである。

ダカラとカラの親和性を否定するものではないが、これらの間には統語的には大きな差異があることが指摘できる。カラの場合、判断系のモダリティについては、

(10) キクチは欠席を繰り返した(にちがいない／かもしれない／はずだ／らしい／ようだ／だろう) カラ、

のように、PカラのPの位置に現れることができるのだが、表現系のモダリティについては、

(11) キクチは欠席を繰り返した(*ね／*か／*よ) カラ、

のように、PカラのPの位置に現れることはできない。それに対して、(9) bのようなダカラの場合は、Pは、ダカラを有する文Qとは「別の文」である限り、Pには形態上の制約は何もない⁴。ダカラの、こうした「接続詞である」という性質は、連沼を含む「従来型の記述」には反映されておらず、カラとダカラを記述するとき、その接近法はまった

く同じであることがほとんどである。

Blakemore (1992) の「談話連結語discourse connective」についての次のような態度⁵は「接続詞である」という性質を記述するとき役に立つ。Blakemoreは、「談話連結語」は発話と発話とをつながなくてもよいという見解を示している。たとえば *so* という「談話連結語」には次のような二つの「用法」があるとされる。

(12) A : You take the first turning on the left .

B : So we don't go past the university (then).

(13) (Hearer (who is driving) makes a left turn)

So we're not going past the university (then /after all).

(12) は、「先行する発話の解釈により、呼び出し可能になる文脈内で、ある表現が導入する発話の関連性の有する仕方を示す」場合に「談話連結語」が使用されている場合である。それに対して (13) は「二つの発話を連結しない」場合に使用されている場合である。そして、双方とも、「発話の解釈を制約するのに使用」しうるとしている。ここに見られる「先行する発話の解釈」という指摘はダカラを記述するのに有効的である。こうした提案は、2で示した問題点を克服できるからである。即ち、「談話連結語」の取り扱いでは、Pは「解釈」であるため、具体的にどのような実現体であるかということを問う必要がなくなる。そして、ダカラは、Qの「発話の解釈を制約するのに使用」という記述をすればよくなる上に、Qに現れる発話について、形態的な制約から解放することにもなる。実は、こうした談話連結語の観点で踏まえながら記述を行っていると思える論考は多くある。蓮沼も、その英文のsummaryではダカラをdiscourse connectiveとして扱っている。しかし、そのように用語を使っているもの、「従来型の記述」から抜け出していないのである。

3-2 PとQの定位

3-1で述べた態度をもってダカラを記述するにあたって、Sperber & Wilson (1986) によって提唱された関連性理論 *relevance theory* の中の道具立てを合わせると、さらに効果的である。Sperber & Wilson は「文脈 *context*」を「心理的な構成概念 (*psychological construct*)」で、世界についての聞き手の想定の部分集合をなす」と定義している。即ち、解釈者が解釈に臨んだとき、自身の「想定 *assumptions*」から活性化された想定の集合を「文脈」と呼んでいるのである。関連性理論では、ある刺激⁶が既存の「文脈」を変化させることを「文脈効果」⁷という「認知効果 *cognitive effect*」をもたらすことであると考え、「文脈効果」が得られる場合、そして、その場合に限り、当該刺激は「関連性を有する」とみなしている。たとえば、「きみには単位はあげられないよ」という発話は、「レポート提出を怠ったから、単位は修得できないかもしれない」という「弱い」想定を有している聞き手にとっては、「単位は修得できない」という新たな「強い」想定を形成するために、「関連性を有する発話」であるとみなされるのである。

以上の関連性理論の道具立てを参照して、ここまでダカラの記述に用いてきたPとQを改めて定位し直そう。Pを実現体として扱うことの困難さを指摘した上で、ダカラはQの解釈を制約するとした。しかしここでこの態度を反古にする。Pを実現体ではなく「想定」として扱うならば、実現体としてのPが特定できなかったとしても問題がなくなるからである。

ただし、Sperber & Wilson (1986) では、「推論」を問題にするために、QもまたPと同様に「想定」として扱っている。しかし、小論は想定PとQの関係を問題にするわけではない。あくまで小論はダカラをQの解釈を制約させる談話連結語として捉えるということから、Qは「想定」

ではなく「表現(=発話)」として扱う。さらに、Sperber & Wilson (1986)で提案された文脈Cも記述の道具立てとして導入することとする。こうして想定P・文脈C・発話Qという道具立てで、ダカラについて記述することとする。

4 ダカラについて

4-1 ダカラの機能

まずは従来「因果関係」として取り扱われてきた例から見てみよう。

(14) a A 「なんか武蔵野線止まってるみたいだよ」

B 「だから、今日、こんなに欠席が多いんだ」

b A 「彼女、卒論の追い込みの時期にサイパン行ってたんだって」

B 「だからあんなに日焼けしてたんだ」

小論では、ダカラが接続詞であるということから鑑み、このような環境においてもAの発話そのものは問題にしなくてもいいとしてきた。実現体Pの特定の困難さを踏まえたとき、Aの発話を契機としてBの認知環境に形成される想定Pという視点から記述すべきであるということを通じてきたのである。ただし、いくつかの例を取り上げて説明してきたように、Pを想定として扱う場合は、「ある」という以外の記述は困難であることは注意が必要である。仮に、(14)のようにPの形成の契機となる実現体があったとしても、話し手の認知環境内でどのような形態の想定Pが形成されているかの特定はできない。また何の実現体がなくとも、想定Pは形成される可能性も多い。しかし、そうした状況でありながら、ダカラが「ある」ことは動かない事実である。

以上のことから小論では、ダカラを「Qの解釈を制約する」という視点において記述することを提案した。そうしたとき、(14)のa「だから、

今日欠席が多い」とb「だから、あんなに日焼けをしたんだ」という発話Qは、ダカラによって、どのような解釈上の制約を付与されているのだろうか。次の例は(14) a・bのBの発話からダカラを除いたものである。

(15) a B「今日、こんなに欠席が多いんだ」

b B「あんなに日焼けしてたんだ」

このようにQからダカラを除いてみると、ダカラの貢献が浮かび上がる。(15)である場合、「今日、こんなに欠席が多いんだ」と「あんなに日焼けしてたんだ」という発話は、その発話時においてなされた出来事の描写を表しているに過ぎなく、それぞれのAの発話とは積極的には関係づけられていない。それに対して、ダカラがある(14) a・bの場合には、それと関係がある何かがあることを示すと同時に、発話時になされた描写ではないということを示している。(14)では、形成された想定Pからそれぞれの発話Qは導出されたと解釈されうるのである。ただし、その想定Pの形成のみからは説明できないことに注意が必要である。つまり、もし形成された想定が「武蔵野線が止まっている」だけだとしたら、それからのみでは「欠席が多い」という想定は導出されないのである。もしそれだけなら、「そうなのか」というように「武蔵野線が止まっている」という新しい想定として認知環境に書き込まれるだけである。この場合、「武蔵野線を使用して通学している学生が多い」などの文脈が活性化されることと、「武蔵野線が止まっている」という想定が形成されることがダカラを含む発話Qが形成されるためには必要なのである。

想定Pの形成と、それに際して活性化された文脈Cとが組み合わせられることによって、Qが導出された。このような認知プロセスを経て、Qの先頭にダカラが現われる。このことからダカラの機能は次のように記述できるであろう。

- (16) ダカラは、次の発話Qは、想定Pの形成を契機として、想定Pと既存の文脈Cとの組み合わせから導出されたものであるということを示す機能を有する。

蓮沼は、(ダカラにとっては意味のない分類ではあるが)「独話型」と「対話型」に共通する性質として、「自分の発言の土台となる情報や知識を、既存のものとして扱うという、話し手の情報の認定のし方に見られる性質である」と記述している。この内「自分の発言の土台となる情報や知識を、既存のものとして扱う」という部分は、(16)に似ると一見思われるかもしれない。しかし蓮沼の説明は、小論のように想定Pと文脈Cを指定していないことから、いろいろな現象に対する説明能力が低い。そして(16)と最も大きな違いは、蓮沼の記述はPについてのものであって、Qについてのものではないという点である。(16)はダカラが独話の環境で現われることについても説明できる。想定Pが、話し手自身によって実現体化されている場合も、そうでない場合もあるが、Qがある想定Pと文脈Cから導出されたということ聞き手に示しているという点では、対話の場合と共通しているからである。

ダカラの機能を(16)のように記述すると、蓮沼が「独話型に還元不可能」とした次の(17) a と b も説明できる。

- (17) a A 「明日中にはなんとかレポートを仕上げますから」
B 「だから、何？」
b A 「明日中にレポートを提出しなさい」
B 「え、でも、明日はバイトが朝から入っていて……」
A 「だから、明日中に出しなさい」

これもダカラを除いた場合と比較してみよう。

- (18) a B 「何？」
b A 「明日中に出しなさい」

もし、「何？」だけならば、それはAの発話が聞き取れない場合の質問として発話されたものであるという解釈を受ける可能性もあるなど、その発話の解釈の幅は広い。また、bの場合も、何らかの意図のもとに最初のAの発話を機械的に繰り返しただけの発話になる。しかし、(17)のようにダカラがある場合は、たとえば「Aは明日中になんとかレポートを仕上げると言っている」というような想定Pの形成と、それによって活性化された文脈Cとを組み合わせることによって、「Aの発話の意図は何であるのか」という意味がQに付与されている。また(17) bは、たとえば「Bは明日バイトが朝から入っていて、明日中にレポートが出せないと言っている」というような想定Pが形成されたことと、それに先立ち、(一度Aを発話したということを含んだ)文脈Cとが組み合わせることで、Qに「この発話は前にも言ったことである」という意味が付与されている。

4-2 ダカラ文について

ダカラを含む発話を「ダカラ文」と呼ぼう。ダカラ文は、(16)で記述したダカラによって導かれている関係上、いくつかの特徴を有している。

(19) 誰かが電球を替えた。切れていた電球がついた。

ここにある二文は、継起的な事態を記述したものとして解釈されることも、前文が後文の「原因」となっていることを記述していると解釈されることもある。それに対して、ダカラ文である

(20) 誰かが電球を替えた。だから切れていた電球がついた。

は、後文は前文の「結果」であるという解釈しか許可しない。こうしたことをもたらしめている理由は、(16)の記述によって示したダカラによるところが大きいことは確かである。しかし、ここで述べたいことは、

なぜダカラ文ではない(19)には二つの解釈があり、ダカラ文の(20)には一つの解釈しかないのだろうかということと、それを明らかにするには、ダカラを記述するだけでは検出できないということである。この場合、問題になるところは、二文の意味内容である。ダカラがあろうとなかろうと、この二文が「並列」されておれば、解釈者はその二文間に何らかの関係性を見出すような内容である。つまり、「切れていた電球の交換」と「電球の点灯」は、それだけで因果関係にあるという想定を多くの人は有しているからである。そのため、

(21) a 切れていた電球がついた。誰かが電球を替えた。

b 切れていた電球がついた。だから誰かが電球を替えた。

(21)において、aはなんとか因果関係として解釈を許可することもできるが、bは多くの人が有している原因と結果に関する想定とは異なるために許可されない。ただしこれは「多くの人が」ということであり、もしそうした想定を所有していない人がいたとしたら、この文は許可される。「従来型の記述」の問題点は、こうした表現について、ここで述べたような説明をすることもなく、許容されない表現として無前提的に提示していることにある。これは、文法的に不適格なわけではないのである。

これは次の例の検討からもさらに支持される。

(22) a この文章は幼稚な内容である。この文章はおもしろい。

b この文章は幼稚な内容である。だからこの文章はおもしろい。
この場合、「文章が幼稚な内容である」と「文章がおもしろい」とことは、相反する事態であるか、それとも並立する事態を表すか、いずれにせよ、その二つが「関係ある」事態として存在しているとは一般には理解されにくい。そのため、aのように表現されれば、その二つの事態が並列されているに過ぎなくなる。しかし、bのようにダカラ文でさ

し出されれば、それを導出したQは、何か想定Pの存在、並びに文脈Cの存在があることを示すことになる。もし、それが直前の発話であるとしたら、その発話との関係は一般的ではなく、きわめて個人的な文脈によるのであると言えよう。ただし、もし、「おもしろい文章は、すべて幼稚な文章である」という想定を有している人がいれば、

(22) c この文章はおもしろい。だから、この文章は幼稚な内容である。ということもあり得る。

以上のことは、次のような記述を生む。

(23) 発話Qを導出する契機となる事態（発話を含む）が発話場にあり、聞き手がそれを認知できる時、聞き手においてその事態から発話Qが導出されたということが解釈可能な場合、話し手はダカラを使用しない場合もある。また、そのように解釈される可能性を打ち消したいときも同様である。

ダカラを有するダカラ文の使用についての以上のような記述は、ダカラ文の文末形式にかなりの頻度でノダが現われるということについても説明ができる。それは二文があり、一方がノダを持たない文で、もう一方がノダをもつ文であるとき、ノダを持つ文はノダを持たない文について何らかの関係づけを行っている。この関係はダカラ文と想定Pの関係と似る。そのため、ダカラ文はノダを持つ文であることが多いのである。

最後に、ダカラ文の特徴は、次のような例も説明することができる。

(24) (出席日数が足りなくなって、留年が決定したキクチに対して)
だから、あれほど、出席日数に気をつけろって言ったでしょ！

(25) (番組が打ち切りになるという話題の中で)

三谷「たとえば、(番組が)リニューアルしたときに、清水さんだけか抜けて、YOUさんになってるとか、そういうときは？」
清水「また、YOUさんですか？」

三谷「そのときはどんな感じですか？」

清水「あの女、許せねえ！」(笑)

三谷「フッフ」

清水「だから、あなたのコーヒーのCMもそうでしょ？」

三谷「アハハハハ (笑)。いつの間にか吉右衛門さんになって
たときのショック (笑)」 (いらつく)

(24) にダカラ文が使用されている理由は、この内容自体、その場の行為・出来事についての注意なのであるが、想定Pと文脈Cとの組み合わせから導出されたということを発話に付け加えることで、「前にも言った」という想起もQに付与することになる。もちろん、そうした意味を付与しないのであれば、ダカラ文を使用しなくとも、この表現は許可される。また、(25) は、ダカラ文の使用が理解されにくい場合である。この場合の話し手は、非常に個人的な理由で、どれかの表現から想定Pが形成された。そしてダカラ文を使用することで、どれかから導出された発話であるということをQに付与している。しかし、文脈上、その導出過程の特定は困難である。にもかかわらず、ダカラ文の使用は可能である。あくまで、話し手において、こうした導出の結果がダカラ文なのである限り、意味的な固定関係に制限されない限り、どのような場合においても、ダカラ文の使用は可能なのである。

おわりに

小論では、ダカラの機能は、ダカラが接続詞であるということに従って、二文間の関係ではなく、ダカラを含むダカラ文において記述すべきであるということを指摘した。ただし、ダカラ文は、想定Pと文脈Cの組み合わせから導出したという解釈を聞き手に与えるものであるが、その性質が、ダカラ以外の言語形式によって保障されているのであれば、

ダカラは必須の要素ではない。従来の研究は、ダカラがある文のみを対象としてきたため、こうしたことを看過してきたと言えるだろう。ただし、小論のこうした態度は、実はダカラにのみ適用される態度ではなく、接続詞全体に援用できるのではないかと考えるが、ほかの形式については、今後の課題とする。

注

- 1 以下、作例・実例を問わず、小論では例文中のダカラには下線を施す。
- 2 蓮沼は「対話型」の「典型的」な用例を単純化して、次のように記述している。

話者A：P

話者B：だからQ

こうした記述のスタイルと記号の用い方は「論理」を見るときに常套句である。小論では後述するように、そうした「論理」関係から接近はしないが、蓮沼の記述とリンクすることが多いことから、こうしたPとQという記号を援用することにする。ただし、小論の言うPとQは、蓮沼のいう対象とは異なった対象を指示するものとする。

- 3 ここでは「言語表現」ではなく、あえて「事態」のレベルで記述した。「事態」間の異同において同じであるならば「意味が同じである」と取り扱ったためである。
- 4 こうした形態上の制約の有無は、カラとダカラのみに適用することではなく、接続助詞と接続詞という形式を対応させたとき、共通に見られる性質の異なりと言えるだろう。
- 5 Blakemore (1992) は、言語的意味の中には「手続き的 procedural」なものがあることを指摘している。「談話連結語」は「概念的意味」

ではなく、「手続きの意味」をもつ形態として記述されている。

- 6 発話の場合が多いが、関連性理論自体が発話解釈に限らない理論であるために、ここではあえて「刺激」とした。
- 7 ある刺激から導出される「文脈効果」は次の3タイプがあるとされる。「文脈含意 contextual implication」と「強化 strengthening」と「却下 contradicting and eliminating」である。

(a) ぼくは単位を落とした。

もし話し手は、「レポート提出を怠った」という状況の認知(想定P)と「レポート提出を怠ったから、単位は修得できないかもしれない」という文脈Cとの組み合わせから新しい含意(a)を導出した場合、この場合は「文脈含意」と呼ばれる。Sperber & Wilson (1986)では、新たに認知した状況を命題として表現した想定Pが、帰結である想定Qを「非自明的に含意せず、かつ、想定P形成以前に有していた文脈Cが想定Qを非自明的に含意せず、PとCとの結合がQを非自明的に含意する場合、想定Pは文脈Cにおいて想定Qを文脈的に含意する」と定義されている。また、話し手が既に持っている文脈Cが、想定Pによって、確信度が高い想定Qに変更された場合、「強化」と言われる。たとえば、話し手が「単位を落とすかもしれない」という文脈Cを既に持っている時、「単位を落とした」という想定Pによって、(a)という確信度が高い想定に変更された場合である。「却下」は、既に有している文脈Cに対して、それとは対立する想定Pが形成され、その結果、当初有していた文脈とは別の想定Qに書き換えられる場合を言う。「単位はなんとかとれるだろう」という文脈Cが「単位を落とした」という想定Pが形成されることで、(a)の想定Qに書き換えられる場合である。

用例出典（本文中は下線部分を示した）

『爆笑問題のニッポンの教養 ひきこもりでセカイが開く時』（講談社）
／『むかつく二人』（三谷幸喜・清水ミチコ 幻冬舎）／『いらつく二人』（三谷幸喜・清水ミチコ 幻冬舎）／『元・阪神』（矢崎良一編 廣済堂出版）

引用文献

- Sperber,D. & Wilson,D. (1986) *Relevance:communication and cognition*
（『関連性理論』内田聖二ほか訳 1993 研究社）
- Blakemore,D. (1992) *Understanding Utterances*（『ひとは発話をどう理解するか』武内道子ほか訳 1994 ひつじ書房）
- 蓮沼昭子（1991）「対話における『だから』の機能」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第4号